毎日新聞　第三種郵便物認可

ピープルの地平へ

世界の市場化に抗して　17

文化

農と食と平和守る実践

ジョゼ・ボベとフランスの農民運動

大野　和興

「これは本当の農民の運動家だなあ」。案内して歩きながら感嘆したことを覚えている。口ひげを長くたらした、小柄だががっちりしたその男は、精力的ではあるがおだやかで、物静かだった。

二〇〇二年十月、日本の市民グループに招かれて来日したフランスの農民運動指導者ジョゼ・ボベの第一印象である。来日したその夜、彼は成田空港近くの農民と交流会をもち、翌日は、空港建設に反対する農民と市民によって一九七〇年代から続いている産直グループを訪ねた。

地元農民にボベは矢継ぎ早に質問する。「配送は？」「値段はどうやって？」「苦情処理は？」。一つ一つが具体的で、彼自身の経験から出てくるものであることが聞いていてわかった。

すでに当時、ボベは世界の反グローバリゼーション運動の顔であった。ジョゼ・ボベの名が世界に知られるようになったきっかけは、一九九九年八月二十二日、南フランスの田舎町ミヨでの出来事だった。小規模農民が組織するフランス農民同盟の呼びかけで集まった数百人の農民と消費者が、建設中だったマクドナルドの建物を壊したのだ。自由貿易で打撃を受ける小規模農民の反撃ののろしとして、この行動は世界の注目を浴びた。ボベはそのリーダーだった。

九〇年代、欧州の農民と消費者運動は、成長ホルモン剤で育てられた米国産牛肉は「子どもたちのからだに異変を起こす」として、共同でボイコット運動を展開。EU（欧州連合）内でホルモン剤投与の牛肉は輸入禁止になった。怒った米国はWTO（世界貿易機関）に提訴。WTOは、EUの措置は自由貿易のルールに反するとして米国に軍配をあげた。米国は南フランス産のロックフォール・チーズなど欧州農産物に報復関税をかけ、農民は大打撃を受けた。

フランスの農民たちは、米国とグローバリゼーションの象徴であるマクドナルドを壊すことで、自由貿易にノンを突きつけたのである。それは、多国籍企業が作る「マルブッフ」（「まがい物の食べ物」を指す造語）と農民手づくりの食べ物とのたたかいであった。

二〇〇一年、ボベは世界最大の遺伝子組み換え種子の会社、米モンサント社にたたかいを挑んだ。南フランスのモンテリマールにあるモンサントの農場に百人の農民とともに入り、遺伝子組み換えのトウモロコシを刈り取ったのだ。遺伝子組み換え作物によって生態系と食の安全が壊され、農と食が地球規模の市場競争に巻き込まれるのを阻止しようとボベたちは考えた。彼はマクドナルドの事件と遺伝子組み換え作物への抗議行動で、二度投獄されている。

二〇〇二年、ボベは、今度は平和運動家の顔を見せる。三月三十一日、イスラエル軍に包囲され、閉じ込められたパレスチナ自治政府のアラファト議長を守るため、欧米の平和運動家約四十人とともに自治政府の議長府に入り、人間の楯となったのである。

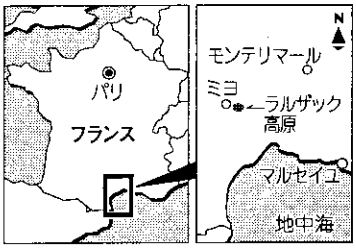
ボベの運動と人生の出発点から考えれば、これは当然の行動だった。一九七〇年代、南フランスのラルザック高原は、軍事基地拡張に反対し農地を守ろうと立ち上がった農民のたたかいに、全土から学生、労働者が支援と援農に駆けつけていた。当時学生だったボベもそのなかにいた。良心的兵役拒否者でもあった彼は、農家に住み込み、草を刈り、乳を搾（しぼ）り、チーズを作り、そのままこの地にとどまって農民になった。彼にとって農と食と平和は、その出発点から結びついていたのだ。

八一年、同じく農地死守を掲げて成田空港建設と対峙していた成田・三里塚の農民たちがラルザックを訪れた。来日初日のボベの行動は、そのお返しだった。三里塚の農民のたたかいが産直や有機農業の実践を生みだしたように、ボベと農民同盟の運動も、地域で生産者と消費者との交流や直売などを積み上げていることを、彼は三里塚での交流で語った。

ボベと農民同盟は十の原則からなる「農的農業」を提唱し、自らの足元で推進している。その十原則のなかには、土地は子どもたちからの借りもの、近隣住民とのパートナーシップ、自然資源を大切にし農業の多様性と農業経営の自律性を守る、食の品質の確保、といった実践課題があげられている。彼はそれを「ローカルがグローバル化を規制する」と表現した。

いま日本でも、自由貿易の中で瀕死の地域農業を立て直そうと、生産から加工・販売までを含めた農の営みを、もう一度農民の手に取り戻そうという動きが広がっている。こうした生産現場での実践の国際的な連帯や交流もまた、これからの運動の重要課題になるはずだ。

〈次回は18日に掲載します〉



三里塚の農家を訪れて話をするジョゼ・ボベ（左）＝2002年10月

【おおの・かずおき】ジャーナリスト、日本国際ボランティアセンター（JVC）理事、アジア農民交流センター世話人。1940年、愛媛県生まれ。著書に「農と食の政治経済学」「日本の農業を考える」など。